

# NEW CROWN 授業実践事例

BOOK 1 GET READY 授業例①

Y.M. 先生

## 指導計画表

(全 10 時間)

時間	学習内容・主な活動
1	Get Ready 1 ・場面（会話）を推測する ・会話を聞いて場面を選ぶ ・場面①の会話を練習する
2~9	Get Ready 2 ・登場人物の自己紹介を聞く ・語句の発音練習 ・コミュニケーション活動  Get Ready 3 ・発音練習 ・書く練習  Get Ready 4 ・発音練習 ・リズム練習

## 実践例

### 1. 「音」から「文字」への スムーズな移行のために

以前まで私は、生徒たちが初めて英語を学習することをふまえ、英語に慣れ親しませるために、教科書に入る前に classroom English や数・曜日・月・色・動物・スポーツ・教科等の単語、What ~ do you like? や How many ~ do you have? What time is it? 等の表現を口頭で導入し発音練習させました。そして、アルファベットの文字指導を行い、LESSON 1 から教科書を用いての授業を行ってきました。平成 24 年度版 NEW CROWN では、小学校外国語活動が必修になったことを受けて、小学校での英語活動を振り返るとともに、文字を導入し「書くこと」に慣れ親しませることをねらいとして Get Ready が配置されています。したがって、最初から教科書を用いて音から文字への指導ができるようになりました。

また、電子黒板が学校に設置され、デジタルテキストやパワーポイント等の ICT 機器を活用することにより、さらに効果的に指導できるようになりました。

Get Ready では単語や表現が『英語ノート』から中心に選ばれています。生徒たちは小学校で *Hi, friends!* のテキストを用いて外国語活動を行っており、Get Ready の単元で小学校での体験活動を振り返るとともに、教師は生徒がどの程度「聞く力」「話す力」があるかを確認し、誤りがある場合、正しく理解するように指導する必要があります。また、「音」と「文字」を結びつけながら指導することにより、「音声」指導から「文字」指導へスムーズな移行が期待されます。

### 2. Get Ready の具体的な指導について

#### (1) Get Ready 1

いろいろな場面での会話が聞き取り問題として紹介されています。英語の授業では様々な classroom English が使用されるので、英語でのあいさつが場面に応じてできるようにすることが必要です。

そこで、まずデジタルテキストで場面を提示し、それぞれの会話を推測させ、①～⑥の聞き取りをさせたあとに、場面①を用いて口頭練習やペア活動をさせました。ここで大切なのは、生徒たちが正しく発音できているかを確認することです。一斉の練習やペア活動の様子を見るだけでは、一人一人が正しくできているのか把握できません。

今後の授業の挨拶の場面で毎回使う表現でもあるので、列ごとに一人一人と会話して発音をチェックしました。合格した生徒には、他の列の全員と会話させて自分の席に着くようにさせます。すると、チェックを待っている生徒も退屈したり私語をしたりすることもなく、また合格した生徒がまだ正確に言えない生徒の先生となって教えるので、TT の授業でなくても短時間で生徒に英語の挨拶を徹底させることができました。

#### (2) Get Ready 2~4

1 時間の授業が「聞くだけ」「話すだけ」「書くだけ」の活動になってしまうと、どうしても間延びした授業になってしまいがちです。そこで、授業の前半に Get Ready 2, 4 の「聞く」「話す」活動を、後半に Get Ready 3 の「書く」活動を設定しました。

#### ①「聞く」「話す」活動

授業の前半の「聞く」「話す」活動では、デジタルテキストの『友だちになろう』に提示されている絵と文字を見ながら発音の練習をさせます。

次にモニターの絵を見ながら What ~ do you like(play)? といった Q&A をしたあとに、グループ対抗の単語ゲームをします。例えば、果物のページでは、What are yellow fruits? スポーツのページであれば What are Olympic sports? という質問にできるだけたくさん単語を答えさせます。英語らしい発音を意識させるために、カタカナ英語ではなく英語らしく発音できたらポイントを与え、たくさん単語を言えたグループが優勝となります。

その際、教科書に出ていない語が出てきたら、電子黒板の白板に単語のスペルを書いて、指で文字を差しながら発音指導をしました。その画面を保存し

てその後の授業でも活用したり、パワーポイントでフラッシュカードを作ったりして指導していきました。また、ページの中に My Box の欄があるので、アルファベットの「書く」指導を終えてから、その中の単語で自分が気に入った語を書かせました。

また、単に単語レベルではなく、*Hi, friends !1, 2* のテキストにある表現を用いて英文レベルで口頭練習させました。したがって教師は、生徒が小学生の時に外国語活動で、どのような表現を学習したのか把握しておく必要があります。私は、小学校の先生から生徒がどの程度学習したかを聞き取り、文部科学省の HP にある *Hi, friends !* を活用した年間指導計画例』を参考にして、「これは小学校の時に習ったよね。」とどんどん英文を言わせました。その際、前もって *Hi, friends !1, 2* で出てきた表現（英文）のパワーポイントを作成しておくこと、英文を常に提示することができ便利です。小学校で既習の英語について、あまり何度も繰り返すと生徒は飽きてくるので、「文字」を見せ、「音」とのつながりを意識させながら指導すると、既習の表現であっても新鮮さを感じるようです。特に、小学校の時から英語塾に通っているような英語が得意な生徒にとっては、文字を提示されることにより、さらに英語に対する興味・関心が高まり、積極的な学習態度が見られました。

## ②「書く」活動

授業の後半の「書く」活動では、生徒の習熟の差が顕著に見られます。一斉指導でアルファベットの書き方を指導しても、既に「書ける」と思っている生徒の中には教師の諸注意を聞くこともなく、どんどん書いてしまう傾向にあります。

そこで、アルファベットを「書く」活動になると、既に「書ける」生徒は別室に移動させ、『どんだんクラス』と『じっくりクラス』の少人数習熟度別に学習させました。どちらのクラスに入るのかはその都度生徒に選ばせました。

「書ける」生徒には、まずペンマンシップを用いてアルファベットを練習させ、テストし、教師が個別に生徒のくせ字や誤りを指摘して、正しく書けるようになったら、授業の前半に出てきた単語のプリント学習をさせました。ここでは、スペルの指導で

はなく、「正しく文字を書ける」ことをねらいとするのでスペルを覚えさせることは避けました。

「書けない」生徒には、以前のように教師が黒板で書き方を見せ、ひとつひとつの文字をペンマンシップに書かせて覚えさせました。以前は、大文字をまず書けるようにさせて、次に小文字を指導するやり方をしていましたが、大文字・小文字を分けて指導するよりも、「今日は大文字の A～G と小文字の a～g を覚えます」というように、大文字と小文字を一緒に関連させながら指導した方が、理解に時間がかかる生徒にとっては、文字の定着度が高いように感じました。そこで私は、大文字・小文字を一緒に指導し、確認テストでは A～g の大文字・小文字のテストをし、アルファベットをすべて学習させたらアルファベット順の大文字のテスト、次にアルファベット順の小文字のテスト、最後に聞き取りテストというように段階的にテストしました。少人数なので机間指導で丁寧に指導することができ、生徒全員が正しく書けるようになりました。

以前の斉授業では、授業中にアルファベットのテストをして、放課後再テストをすることが多かったのですが、放課後書けるようになるまで「残られる」ことにより、生徒の「書くこと」への苦手意識、ひいては英語嫌いを作っていたように思われます。授業中に少しずつテストし、テストに合格する喜びを与えることにより、生徒の「書くこと」に対する自信もつくのではないのでしょうか。

## ③フォニックスの指導

Get Ready 4 はアルファベットの文字が表わす音の学習ですが、平成 24 年度版で初めて教科書に登場しました。今までも私は、他の教材を用いてフォニックスの指導を行ってきました。『アルファベットの音』をしっかりと理解させることは、その後の単語学習に非常に効果的です。

また、音の学習だけでなく、リズムに合わせて発音させることも必要です。小学校の外国語活動の授業を参観したときも、チャンツの活動が多く取り入れられていました。したがって、リズムに合わせて発音練習することは、生徒にとっては慣れている活動なので、積極的に楽しく取り組むことができました。

テストに関してですが、フォニックスについては1学期の中間考査でも、アルファベットの音の問題を出題しました。

問 放送されるそれぞれの単語の一番初めの文字を、アルファベットで書きなさい。

(リスニング問題)

問 次の絵について、その単語の初めの文字をアルファベットで書きなさい。(筆記問題)

定期考査で出題することにより、生徒の理解度を知ることでもできますし、何よりもテストの範囲とあつて、生徒はより真剣にフォニックスの学習に取り組むことができました。

### 3. おわりに

電子黒板やデジタルテキストを活用することにより、文字・イラスト・音を同時に提示することができるので非常に効果的です。教科書やピクチャーカードを見ながら学習させていた頃とは、効果の差が歴然としています。私の学校では、会議室に電子黒板のモニターがあるので、英語の授業は会議室で行っています。最近では、プロジェクターに取り付けて、一般の教室でも黒板にマグネット式のスクリーン(あるいは白い紙)を貼ってデジタルテキストを使用することができるものもあります。学校によっていろいろな事情があると思いますが、英語の授業では電子黒板・デジタルテキスト・パワーポイント等を積極的に活用することが望ましいと思います。

「中1ギャップ」の問題が重視されていますが、英語の授業に関しても、小学校で英語の歌やゲームやALTとのやりとりで英語の楽しさを味わってきた生徒たちが、中学校の英語の授業で「英語嫌い」にならないようにするために、まずはGet Readyで小中接続をスムーズに行うことが大切です。